

## あいかわらず 長い編集後記

### 編集長 (ダン シロウ)

■東日本大震災後、二冊目のマガジンの発行だ。時が経つのは早い。しかし原発事故の復旧は遅々とした歩みのようで、私のような非科学技術系の人間には、本当のところ何処に向かっているのか、よく見えない。

今号で水野スウさんが「いのみら通信」の事を書いて、油断していたと書いているが、本当に、災害は忘れた頃にやってくるのだと思った。まさか原発がこんな事態を日本にもたらして、手に負えなくなるとは。

■東北各地の復興の歩み個別化はいよいよ明らかで、個々人に運不運があるように、再出発の道程も、本当にケースバイケースになっているようだ。じれったく、不本意な今を過ごす人も多いに違いない。

私は阪神大震災と東日本大震災と二度、大きな被災を脇で見ていた巡り合わせになった。阪神大震災の時は、それがどういう事なのか、何が突きつけられているのかも分からない、とまどいと無力感の中にいた。

しかし今回は少し違った。さっさと出来ることをすればいいと思ったのだ。その一つは速やかに届くルートの義援金の対応だった。早々と自分にふさわしい額や対象を決めて実行した。

その後は、自分のルーチンワークを粛々とこなして時を過ごした。続々と明らかになる様々な意見や取り組みに、心動くことがなか

ったわけではないが、それはその出来る人たちに委ねた。

そして私は今、この後の地域社会における家族のことを考えている。被災地では物が壊され、失われただけでなく、価値観も崩された。そんなところで、元の暮らしをイメージして、復旧を目指すのは違うのではないかと思う。失ったところからの再出発には、価値観にも見直しがあつていいと思う。私の関わる分野なら、「家族」がそれだ。

息子や孫の学歴、進学問題。産業構造の近代化の中の、漁業と関連産業、地場産業の後継者問題。高齢化する小さな村や街の過疎や空洞化等。こんな前提を承認したまま、再びそこに向かって復旧を目指すのは違うだろう。

だから私は、生まれかわらなければならない街に向かって、「家族」の新たな価値観の発信できたらと思っている。

何をどうするのかは、まだ協議段階だが、いずれ実現できると嬉しい。そのために今必要なのは、チャップリンの言うように、「勇気とサムナー」だ。

### 編集員 (チバ アキオ)

■38歳で初めて、スタンドまで届くホームランを打った。学生時代、野球はうまい人がいるので、自分なんて…と思っていた。しかし、今は楽しかったらいいやん！すきやからいいやん！と開き直る。そうやって動きだし、継続していると、いろいろな人が協力してくれたり、一緒に動いてくれたりする。本当にチームメイトに感謝です。

■肉体の経年劣化を考えると複雑な競技ほど、今しかない。メンバーは対人援助職がほとんど。先日は大会に出て準優勝も。いつか、ケガをして辞めるということもあるだろうけど、やりたいのだからしょうがない。

■チームメイトには援助系有資格者等の専門職も多い。野球以外のところでは、「援助」「支援」のことも話したりするメンバーだが、準優勝祝賀会では何時間も野球談議のみ。ユニフォームはこれがいいんちゃう！マリナー

ズ風がいい！縦ジマがいい！ええ～？！それだけは嫌！カブス風やろ！カープやん！いやいや福井商業高校の炎のマーク風がええやん！背番号何番がいい？24番！「絶叫調～中畑清です！！」しか浮かばへん！ちゃうやん 桧山やん！だから～ノーステップ打法は～、アンダーソックスが見える方がいいわ！昔風やな！脚長く見えるで裾までの方が！スパイクに引っ掛かるって！やっぱ俺は門田やな…っと、30代から60代のメンバーが話す。こうした場所があり、ここでの出会いがまたいろんなことにつながっていく。同じ時代を生き、こうして出会った喜びがある。好きなことをしているとそう思える。

■私が担当している社会福祉士養成課程の学生であり、職場仲間である川本健士氏が在籍するバンド「ははの気まぐれ」のライブに行った。会場はいっぱい。ステージまで、ほんの2メートルぐらいのところまで観客になる。生音が本当にいい。演奏もすごい！川本氏はドラム担当。近くで見ると一打、一打の違いがわかり、これまたすごい。ネットでCDも購入し、楽しんでます。それを聴きながらの対人援助学マガジン第5号編集作業。

**【次号予告】**次号は対人援助学マガジン執筆陣による初の対談・共同企画が進行中。26年の時を超えた企画。大阪のとある公立小学校で、新しい先生が着任。そこから、物語は始まります。いわゆる障害児と健常児が同じ教室で、クラスをつくっていく「統合教育」というスタイル。そして現在。少子化もあり、教育現場、福祉現場、あちこちで起こっているいわゆる「統合」状態。このことについて、当時の担任教師、当時の児童、そして現在の「統合」現場で活躍されている幼稚園園長が対談。そこでは、何が起こり、どんな努力をし、どんな喜びと苦しみがあり、子どもたち、保護者たちにはどんな経験になるのか、そうした経験を持つ児童のその後の人生に与える影響はあるのか、などテーマは尽きません。対談場所は、タカラヅカ歌劇で有名な、兵庫県宝塚市にある「宝塚ホテル」。「大正モダ

ン」を彷彿とする歴史あるホテルの一室にて、どんな話が繰り広げられますか。記事とともに、こうした対人援助学マガジンの新展開にも、ご期待ください！

## ■告知■

### 対人援助学会：定例会

**10月14日(金) 19:00から21:00**

京都駅前キャンパスプラザ6F  
立命館大学教室で。家庭児童相談所で働く八木アリコさんが、「ネグレクトと転居問題」について語ります。

## ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

学会時にも販売しましたが印刷版対人援助学マガジン(1号、2号、各1000円、第3号、第4号1300円)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

## マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438

ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

## 対人援助学マガジン

### 通巻5号

第二巻 第一号

2011年6月15日発行

<http://humanservices.jp/>

## 対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

## 対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

### 表紙の言葉

#### 「戻りたい街へ」

阪神大震災のしばらく後、西宮北口駅までは動き始めていた阪急電車に乗って出かけた。日曜日だったと思う。

駅前にあった壁半分が崩れ落ちて、まるで玩具のドールハウスのようになった、7、8階建てのマンションを見た。各部屋の中が全て遠目に見える風景に圧倒された。

それまで私が目にしたことのある喪失を連想させる景色のマックスだった。おさまらない感情に、ドキドキしたとしか言い表しようがない。気を取り直して神戸に向かって歩こうとして、路地の小さな一軒家の張り紙を見た。そこには「何とか無事で、娘の所に避難しております。ご連絡は・・・」とメッセージがあった。

駅近くの商店街から、一筋入った静かなこじんまりとした住宅街だった。しかしその時、私が見ていたのは、残骸の山だった。生け垣、盆栽、丹誠込めたであろう植木が、壊れた家屋と共にぐちゃぐちゃの瓦礫になっていた。小市民のプライバシー保護を連想させるブロック塀が、その周りのちいさな心配りの積み重ねを踏みつぶしていた。

ここで私の心が折れた。何をしに、何を見に、なぜ行くのか。一つの理由もなかった。

援助物資を持っていたわけでも、尋ね

なければならぬ近親者が居たわけでもない。友人、知人はたくさんいたが、私が手ぶらで駆けつけるのは唐突な気がした。結局そこから前には進めず、引き返した。

当時の私の職場は、支援の枠組みからも外れた、期待もされていない機関だったせいもあって、自分の何も出来なさが余計にこたえた。そして1年以上、神戸の街に足を向けることができなかった。

この間、大阪の漫画家が集まって、阪神大震災復興支援漫画展を開催することになり、作品の提供を求められた。

そこで描いたのがこの作品だ。ジグソウパズルは壊しても、壊しても、組み直すとまた同じ絵柄になる。街、人、暮らしとは、そういうものではないのか。

土木畑出身の当時の市長は、復興を災い転じて福となすとも言いたげに、新たな街づくりを吠えていたが、「街」や「暮らし」の蓄積について、感受性が違うと思っていた。「戻りたい街へ」はそんな思いで描いた一枚だった。

しかし今、東日本大震災と大津波の爪痕は、戻りたい街への想いも含めて押しつぶしてしまったところがある。そして、戻りたくても戻れない原発事故被災地のような想像を超えた事態も生み出してしまった。

私にとっても、このマンガをもう一度登場させる機会があるなど、想像もなかった。天災同様、忘れていた作品だった。

15年前、阪神大震災後に描いた作品が、今どのように皆さんの目に映るのか、マンガ作家としては興味深いところだ。

2011/06/05

団士郎